

---

# 世界 -TheWorld-

マイペース

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界 - The World -

### 【コード】

N9932C

### 【作者名】

マイペース

### 【あらすじ】

世界が壊れ、そして始まった。すべての法則を失った世界は、どんな未来を創り出すのか…

## Opening

世界はその日も動いていた。あらゆる世の法則は変わることなく機能し、その日も世界を支えていた。

そしてそれは永久に続き、これからもずっと世界を支え続けると思われていた。

実際にそれは不変のモノで、それが故に皆に信じられていた。

そう、その時までには…

それは突然に訪れた。

異変はまるで以前から決まっていたように、ごく自然に、緩やかに、当然のように始まった。

最初に異変が観測されたのは、数十年前。とある天文学者たちが星の位置のズレに気付いたのが最初だ。

初めは測定ミス、もしくは気のせいだと思われていたが、時が進む

につれ、その座標のズレは明らかにおかしくなっていた。

そして原因は全くわからない、何が起きているのさえも…

そして異変は遠くの星から、次第に近くの星までに影響を及ぼすようになっていった。

さらに時が経つと、ついに自分たちの惑星にまで異変が進入してきてしまった。

同時に不可思議な事象とその理由が判明し、あらゆる研究者達を驚愕させた。

物理法則が、成り立たない。

突如、今までの世界が崩壊し、そして新しい世界が始まった…

## - 廃墟の中

高度な文明を象徴していたはずの、多くの巨大な建物　ビル群が崩壊し、ガレキの山を築いている。

舗装され、整備されていたはずの道路が崩落し、大きな亀裂が入ったまま放置されている。

一昔前までは「中枢都市」として栄えていたこの街は、いまや見た目廃墟となっていた。

しかし、どうやら人は少なからずいるようで、廃墟の中にもまばらだが人影を見ることが出来る。

…中でも特に目立つ場所。　なんとか原型と留めているといった感じの、

元は

「タワー」と呼ばれていたその建築物の屋上。そこに誰かいるようだ。

元タワーの屋上には、一人の少年がいた。

短めの黒髪と鋭い眼光を持ち、瞳に赤い光をたたえた少年だ。

それ以外には目立った特徴もなく、服装もごく一般的なものを身につけている。

こんなところに居なければ、普通の少年の何の変わりようもないだろう。

「見張り…ね。ただ退屈なだけだな…。はあ…そうは思わないか？」

高所ゆえの強風のなか、一人立てるかどうかの狭いタワーの頂上で

少年が口を開き、誰かに話しかける。だが周りには誰の姿も見えない。

「何言ってるんだよ。いつあいつらが侵攻してくるか分からないし、これを任されるって事は信頼されてるってことでしょ？嫌でも頑張らなきゃ」

と思いきや、返事は普通に返ってきた。下からだ。

どうやら見えない話相手は、屋上の1つ下の階層にいるらしい。

「ていうか君はいいよね。苦労して登らなくても頂上に行けて。落

ちても平気だしさ」

返事の声の主が、梯子を使って屋上に顔を出した。あまりの高さに表情が少し強張っている。

色素の薄い茶色の髪に、蒼い目をしていて、腰には命綱をつけた色白の少年が出てきた。

「でも俺のは戦闘には向いてないんだよな。俺は逆にお前のが羨ましいんだが」

黒髪の少年はそう言いながら、振り返って茶髪の少年の方を向く。

同時に命綱をつかんで、無理矢理に彼を屋上へと引きずり出した。

屋上には一人分のスペースしかないので、2人共落ちそうな体勢になった。

「なああああつ！？待って怖い駄目落ちたら死ぬ！」

「見張りなんだから、ここの方がいいだろ？それになかなか壮観だぞ。あと少し黙れ」

「分かった！だから降ろして下さい！集中できないから！」

「なら集中力の修行になるさ。つーかこの見張り台崩れそうだよな。」

「うるさい落とすぞ」

茶髪の少年はかなり本気で怖がって文句を言いつつ開放を要求しているが、

黒髪の少年はそれを受け流しつつ、冗談交じりに脅し文句をかける。

「そろそろ怒るよ！？降ろしてくれないと斬るよ！？」

数分間それが続いてから、支配される側だった少年がついに反撃に出た。

「分かった分かった、さすがにそれは困る。ほら」(ドサッ)

円滑に進まないやり取りの末、茶髪の少年はやっと解放された。

「もう…地上に戻ったら覚えてるよ…」

「ああ悪かった。ならば俺は高所にでも逃げていよう」

そこで少年は思い出したように言う。

「って任務しなきゃいけないんだ。北側頼むね」

「… 侵攻なんてもう半年もないんだぜ？ サボっても平気だと思っけどな」

「僕もそうは思っけどね。 まあ万が一ってこともあるから、手抜きは適度にしてやるっ」 そう言いながらも、 2人は真面目に見張りを始めた。

もう、いつ何が起こっても驚けない世界を、 交代が来るまで見渡す限り眺め続けていた。

そして、 敵は少年たちのいる地区を壊滅させようと、 すぐ地下を進み来る。

## 1 - 生まれ変わる世界

あの大きな変異があつてから、数年が過ぎた。

突如として、今まで発展してきた科学技術、慣習的な知識、発見された法則など

すべてが意味を成さないものになったため、大変異の直後は混乱の極みだったものの

ここ数年間の努力の結果、なんとか日常生活は普通に送れるまでに文明は復興した。

ただ、重力変化による建築物の崩壊、電気性質の変化による停電、物質の化学的性質の変化による機械の無力化などの「大きすぎる変化」はあまりに大きな被害を出し、人口を以前の10分の1程度にさせてしまった。

あの大きな変異があつてから、十数年が過ぎた。

いまだに機械が作動しないため、崩れた建物は修理はおろか、ガレキの撤去さえされていない。

ほぼ全ての人間がフリーの研究となり、日々使えなくなった法則の改変を試みている。

しかし同時に情報の取り合いも始まり、新発見があるたびに抗争が発生するのも珍しくなくなった。

新発見をすれば一気に社会的地位が上がるこの時代、各所で争いが起こったものの

技術の復興は順調に、確実に、加速度的に進んでいった。

ただ、もっとも急速に復興したのは自然科学ではなく、火薬や爆薬の生成、金属の精錬などの「武器」の技術だったが。

あの大きな変異があつてから、数十年が過ぎた。

火薬・爆薬に関する技術は、変異が起こる前のものと変わらないままに発展したようだ。

化石燃料を用いる機械もやっと動くようになったが、これは爆薬研究の副産物らしい。

食糧の問題、医療の問題も改善されてきたため、人口はまた増え始めた。

相変わらず研究者たちの取り合いは続いていて、今では「研究者のグループ」が

いくつも誕生し、グループ同士で抗争を行うようになっていく。

それからさらに十数年経ったころ、変異後最大の事件が起こった。

「進化した人類」または「適応した人類」とも言える

今までの人間にも、どんな生物にもなかった能力を持つ人が現れ始めたのだ。

この時、世界は研究者たちがグループごとに都市国家のようなものを作り

自分たちの隣国と対立・合併を慌しくしている時代だった。

そのため飛行機も強力な兵器もないこの時代において、強大な力を

持つ

「進化した人類」たちは新たな研究対象とされる一方

大きな戦力として戦いに投入され、それに伴い抗争も一気に過熱していった。

その結果、変異が起こる前からいた人々は真つ先に死んで極端に数を減らした。

一方で「」と呼ばれるようになった「適応した人類」たちは生き残った。

最終的に人類のほぼ全てが「イレギュラー」へと上書きされた。

彼らは従来の機械の力も、銃器の力も必要としなかったため

すべてを破壊し、そして自分たちに合うよう再構成を行った。

今までとは全く違った、まさに新しい世界を築き上げた。

そう、この世界は、元の痕跡を残さず、完全に生まれ変わったのだ  
った。

## 2・物語の始まり

広大な廃墟の中、その一部分に真新しい小規模な都市が作られていた。

面積はせいぜい40平方キロメートルで、外周を大きな塀で囲まれている。

形式上の名称を「N60・E140・6」、通称「アクセル」と呼ばれる都市だ。

この物語は、この都市に住む一人の少年を中心に描かれていく。

都市の西側に建設されている戦闘訓練場、その敷地内に少年はいた。少年はこの訓練生の一員で、6年工程のうちの2年目。つまり2年生である。

今は戦乱の世なので、すべての人が必ずこの訓練所に通うことになっている。

訓練場の中の、まるで射的場のような場所に多くの訓練生が並んで決められた的を狙い撃ちしている。しかし、飛び道具らしき物は見当たらない。

「撃つ」と言っても、「飛び道具で何かを発射する」という訳ではないようだ。

その中、12個並列している発射台の右から7番目に位置する台にこの話の主人公となる、赤い髪に真紅の瞳、加えて緩い表情を持った少年は立っていた。

「いつけえええええーッ！」

少年がそう叫ぶと、掌が光を帯びた。そのまま投げるように腕を振ると

少年の手から光球が発射され、的に向かって飛んでいった。

その直後、離れた場所でドカーンと大きな爆発が起こる。

その少年の的となっていた頑丈そうな 厚さが10cm近くある、石製のボードは一撃で粉々に粉碎され、破片がその辺の地面に広範囲に渡って飛び散った。

「おおー……」と、同じ場所にいた全員が感嘆の声を上げる。

教官らしき人も目を見開き、さすがだな、と口々に言っているようで今の光球が、いかに並外れた破壊力を持っていたのかを物語っている。

自分の番が終わった少年は、「ふう」と息を漏らしながら

自分と同じく撃ち終わった（ボードを破壊し終わった）訓練生たちが並ぶ列に向かって

歩き出し、列に加わろうとした。すると、その中から1人の少年が飛び出してきた。

「さすがメル！相変わらず凄いね、その出力！」

やけに調子がいい、青い髪と碧眼が特徴的な少年だった。

その少年に「メル」と呼ばれた主人公の少年は、それほどでもない、

と言葉を返す。

「一撃で破壊できる人なんて、そうそう居ないよ！誇れることさ！」

「うーん、出力が高くても当たらなきゃ意味がないだろ？今後の課題だなー…」

そうメルは言ったが、青い髪の少年はそれを無視するように賞賛し続けた。

「今回は一発で当たったし、最近精度いいじゃないか！みんな驚いたよ！」

その言い方は「メルなんかが一発命中させたのに驚いた」と言っているようにも取れるが…。

「命中率98%を誇るクロに、30%の俺を褒められてもアレなんだけど…」

メルは破壊力が高い代わりに命中精度が低く、訓練場の外壁を吹っ飛ばしたこともある。

それに引き換え、クロと呼ばれた少年は高い命中率をキープしており

先ほど自分の番のときも、放った23発全てを的へと正確にヒットさせ、見事破壊していた。

ちなみにボードは普通、10発程度で壊れる。つまりクロは破壊力の方が低かった。

「出力と命中率、容量に効率… 何事にもバランスは大切だな…」

そうメルがつぶやくように言うと、反応してクロは

「まあ俺もお前も極端にバランス悪いよな！。2人合わせて2で割れば丁度よくなるのに」

と少し調子を落として、つぶやくように相槌を打った。

それからしばらく2人は他の訓練生たちの射撃訓練を見ていたが、すぐに飽きてしまったようだ。雑談を始めようとして、しかし同時に突如ベルが鳴り響く。

この授業（この訓練所は学校のようなもので、戦闘訓練は授業の一部）が終わった合図だ。

「ああ、丁度いいタイミングだ」「俺らは次、物理だっけ？北館だ

し急ごうか」

ベルが鳴ったのを機に訓練は終わり、生徒たちは次の授業のために移動し始めた。

メルとクロも同じ教室のメンバーと共に、別の場所に移動していき  
ました。

このように、「イレギュラー」の人たちは不思議な力を持っている。  
原理も何もかもが謎だが、「エネルギー」を自由自在に操ることができるのだ。

（つづく）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9932c/>

---

世界 -TheWorld-

2010年11月25日20時12分発行